

小泉義博著 『本願寺蓮如の研究』

著者	老泉 量
著者別表示	OIZUMI Ryo
雑誌名	北陸史学
号	67
ページ	97-102
発行年	2018-12-30
URL	http://doi.org/10.24517/00060226



新刊紹介

小泉義博著

『本願寺蓮如の研究』

老泉 量

本書は二〇一六年に発刊された上巻と、二〇一八年に刊行された下巻からなる一大著作で、上下二冊合わせると一〇〇八頁に及ぶ（上巻四六三頁・下巻五四五頁）。著者はこれまで『越前一向衆の研究』（法蔵館、一九九七年）や『本願寺教如の研究』（上、法蔵館、二〇〇四年・下、二〇〇七年）といった浄土真宗の歴史に関する論考をまとめてこられたが、とくに重厚な花押分析が特徴的である。本書においてもその手法は遺憾なく発揮され、蓮如花押の変遷について詳述されている。本書のもうひとつの特質として、蓮如の生涯を論じるにあたって、多くの親しい弟子や一族の生涯についても考察を加えている点が挙げられる。蓮如子弟については、必要に応じて語られることはあっても、その生涯までを見通すことは少なく、注目すべき点である。

また、本書の各章はそのほとんどが新稿から成っており、一貫した視座から論じられていることが分かる。

本書は次のような編目で構成されている。

（上巻）

第一章 長沼浄興寺と本願寺

第二章 金沢別院所蔵の絵像三点

第三章 蓮如の陸奥下向と長沼浄興寺

第四章 巧賢充ての蓮如書状

第五章 専修寺真恵の坂本移動と蓮如

第六章 長沢福田寺の後継者問題と蓮如

第七章 加賀善性寺所蔵の蓮如書状と白山河大洪水

第八章 寛正の法難と蓮如の応仁讓状

第九章 蓮如の越前滞在と吉崎坊創建

第十章 蓮如の「お叱りの御書」と加賀錯乱

第十一章 「内方教化御文」の用字について

第十二章 青野真慶充ての蓮如書状

（下巻）

第十三章 常楽寺蓮覚充ての蓮如書状

第十四章 光闍坊蓮慶の生涯と蓮如書状

第十五章 充所欠失の蓮如書状三点

第十六章 蓮如による山科本願寺と大坂坊の創建

第十七章 慶恩坊蓮慶充ての蓮如書状

第十八章 長沼淨興寺了順・了周の本願寺修学

第十九章 和田本覚寺充ての蓮如書状

第二十章 浄教坊充ての蓮如書状

第二十一章 蓮如の生涯とその花押

第二十二章 書状と絵像裏書の様式論

最初に本書のおおまかな構造を見ておこう。第一章から第二十章までは、それぞれ蓮如書状や蓮如下付物を対象に、とくにこれまで年代の判然としなかった書状の年代特定に重点を置いている。そして第二十一章は、それまでの個々に取り扱ってきた議論を、蓮如の一代記という形に落とし込みながら、花押の変化を整理するという、まさに総括ともいべき章であり、全体で最も長編の論考となる。

このように本書は第二十一章に重点が置かれており、それまでの二十章は、その基礎作業とも言うべき位置にあるが、一部花押の形をもとに年代を推定するなど相補的な部分もある。以下、各章ごとの内容を簡単に確認していくが、本書のあとがきでは、著者自ら各章における新知見を整理しており、こちらから各章の趣旨についても確認することができる。

まず、第一章は、本願寺歴代住持による聖教類をもとに、長沼淨興寺の寺伝に記された系図の矛盾を指摘し、同時代史料に基づいた新たな歴代系図を提示する。そして五点の存如書状を通して、淨興寺子弟らによる本願寺修学の実態について考察する。

第二章では、本願寺派金沢別院に所蔵される巧如絵像、存如絵像、蓮如絵像の裏書に注目し、これらはいずれも金沢別院の前身である尾山坊に授けられたものと指摘する。

これまで金沢御堂（金沢別院の前身）の成立は天文十五年（一五四六）が通説とされ、それ以前については言及されてこなかったが、巧如絵像の下付された嘉吉三年（一四四三）を、金沢御堂の前身である尾山坊惣道場の設置時期と評価する。

第三章では、蓮如による陸奥下向の事実を示す三点の文書の年代について分析し、文安六年（宝徳元年、一四四九）の旅であることを確認していく。

第四章では、現在越前市元町に居住する小川利兵衛家に所蔵される巧賢宛蓮如書状の発給背景と伝来経緯について考察する。そして文書発給の背景として、巧賢の兄である存如の病臥と蓮如の妻如了尼の死という蓮如周囲の混乱状態を指摘する。

第五章では、専修寺文書に残される五点の蓮如書状を分析し、専修寺真恵と蓮如の関係悪化の背景、及び蓮如書状で問題とされている近江坂本移転の時期について考察する。そして蓮如花押の形から、これまで通説とされてきた長祿三年（一四五九）移動説を否定し、康正二年（一四五六）移動説を提示する。

第六章では、寺伝で語られる長沢福田寺の歴代住持の並びと、聖教類の記述から見える住持歴代の順番に矛盾があることを指摘し、聖教に見える順序を重視すべきであると述べる。次に福田寺新任持の就任に関する二点の蓮如書状の成立年代について明らかにする。

第七章では、金沢市四十万町善性寺に所蔵される充所欠如の蓮如書状の発給年次について花押の形から分析する。そして花押の該当する年代と書止文言から、法慶坊順誓充てであったことを指摘する。

第八章では、寛正の法難の結果、蓮如に代わり順如が新任持として活動していくことを指摘する吉田一彦氏の論に対し、吉田氏が疑問視する応仁讓状が直ちに偽文書とは考えにくい点、そして延暦寺側が順如の住持就任に反対した可能性があることから、順如はあくまで後見の立場に留まったと指摘する。また、無碍光宗の禁庄を目的とする延

暦寺の動きに対し、本願寺擁護のために、朝廷が積極的に介入した結果、末子相続という形に収まったのではと述べる。

第九章では、従来等閑視されがちであった戦国期吉崎御坊そのものの創建経緯と、二度にわたる焼失と再建の経過について分析し、その具体的な変遷を描き出す。

第十章では、「お叱りの御書」と呼ばれる四点の蓮如書状の発給年次について分析する。かつては長享二年（一四八八）の一向一揆で、富樫政親を滅ぼしたことにより將軍足利義尚の怒りを買った蓮如がやむなく出したものだとされてきた。ところが、北西弘氏が花押形状の分析から長享年間の可能性を否定し、文明七年（一四七五）の一向一揆後と新たに位置付け、以後それが定説化した。著者は、文明七年（一四七五）の一向一揆は蓮如主導の一揆と考えられることから、七年の可能性を否定し、文明五年に、幸千代方に属する門徒の動きを抑制するために提示したものと位置付ける。

第十一章では、蓮如御文の中でも、女性教化に関わる御文にのみ漢字・平仮名まじりの表現が用いられていることに注目する。なかでも「内方教化文書」と呼ばれるほぼ同一内容である四点の御文は、その内二点が漢字・片仮名表

記で書かれている。蓮如にとつて片仮名表記の御文は「如来ノ直説」であることを前提とする特別な文書であったのに対し、平仮名表記の御文は美術品的要素が濃く、出家者と非出家者として使い分けられていたのではないかと推定する。

第十二章では、三河国の青野真慶に充てられた五点の文書の発給背景について順を追つて考察する。蓮如が太刀の購入を強く希望した背景には、個人的な嗜好ではなく、富樫氏との関係回復につながる重要な意義があつたことを指摘する。

第十三章では、蓮如から常楽寺蓮覚光信に充てられたと思われる三点の文書について考察する。これらはいずれも「兼」と署名されるだけで花押がないが、著者はいずれも筆跡から蓮如筆で間違いないと判断し、その発給年次を分析する。

第十四章では、加賀・越中における本願寺進出に重要な役割を果たした、蓮如第七子である光闡坊蓮誓について、彼が受領したと思われる蓮如書状十三点を通して、その生涯について通観する。

第十五章では、充所不明の三点の蓮如書状の内容を分析し、いずれも蓮誓充てであると位置づけ、その発給年次を

明らかにする。

第十六章では、山科本願寺と大坂坊の伽藍配置について考察する。山科本願寺の伽藍配置に関しては草野頭之氏が明らかにした、中心に御影堂があり、その南に阿弥陀堂が置かれるという配置が通説となっているが、著者は御文をもとに現在の西本願寺の伽藍配置（北に阿弥陀堂、南に御影堂）こそが山科時代以来継承された形ではないかと指摘する。また、御文に記される木材の本数から、より具体的な堂舎の規模について検討する。

第十七章では、蓮如に深く帰依していた加賀の慶恩坊蓮慶について、関係文書六点を通してその生涯を通観する。

第十八章では、長沼浄興寺に所蔵される、本願寺修学に関わる五点の蓮如書状に注目し、その年代比定を試みる。

第十九章では、和田本覚寺充て蓮如文書五点と実如文書一点の発給年次について考察する。そして本覚寺蓮光を中心とする吉崎御坊の復興があり、蓮如がその復興状況を注視していたという事実、蓮如没後の実如もそういった蓮如の強い懸念を受け、本覚寺の動静に気を配っていたことについて論じる。

第二十章では、石川県白山市の林西寺（もと浄教坊）と金沢市の善照坊に残された浄教坊充て蓮如書状の発給背景

について考察する。

そして、第二十一章ではこれまでの内容を前提としつつ、蓮如の生涯を通観し、花押の変化について整理していく。著者によれば、蓮如の生涯は九つに区分され、花押の変化は二十六に分類されるという。

第二十二章では、蓮如の、「本願寺 蓮如」「信証院 蓮如」などの署名表現を巡り、文書などに見られるその変化の時期区分を試みる。また、絵像の裏書の記載順序について、存如以前は、絵柄に応じて異なる文字順序だったのに対し、蓮如はこれを全ての絵柄で統一し、一つの様式として確定させていくことを指摘する。

以上全二十二章からなる蓮如の生涯にまで言及した各論は、随所において通説とは異なる指摘がなされており、今後学会等の場で検討が加えられることにより、さらなる議論の深化が望まれる。とくに蓮如花押の編年化はこれまでも何度か試みられてきたが、今回あらためて重厚な分析とともに提示されたのである。今後も新たに蓮如裏書の絵像や、蓮如筆の法名状などが見つかった際に、大いに参考にされ、またさらに精度が高められていくことと思われる。

最後に、本書の中で の 先行研究の取り扱いに関し、若干気になった点があるので、確認しておきたい。まず、第十

六章における草野説の批判についてだが、著者はこの草野説の根拠について、現在の東本願寺の伽藍配置から想定したものでないかと述べる(本書下巻、一四七頁)。しかし、御影堂・阿弥陀堂の南北関係について草野氏は、少なくとも『真宗本廟(東本願寺)造営史―本願を受け継ぐ人々―』(一三一頁、真宗大谷派宗務所、二〇一一年)の中で、『第八祖御物語空善聞書』(『真宗史料集成』第二巻、同朋舎、四三六頁)の「御ノリモノニテ御堂ノ南ヨリ阿弥陀堂ヘ御参リアルトテ」という一文を用いて説明している。著者はこの部分を見落としたまま議論を展開しているため、注意する必要がある。そもそも山科本願寺伽藍の位置については、草野氏以前に櫻井敏雄氏(『浄土真宗寺院の建築史的研究』法政大学出版局、一九九七年、三四頁)によって示されている点も付言しておきたい。また、第二十二章では、絵像裏書の読み方に関して、金龍静氏の説を踏襲して左から右に読むべきであると位置づけている。この点に関して著者は、金龍説には脊古真哉氏らによる批判があることは紹介する。しかし、その批判の内実についてはとくに吟味せず、「突飛である」という表現に対してのみ、反論している(本書下巻、五二〇頁)。脊古氏らは注記箇所にて、「手次関係や被下付者の所在地が二行にわたって記されている

場合はどのように読むのであろうか。存如裏書はどのように読むのであろうか。『存覚袖日記』に見える裏書はどのように読むのであろうか」(『蓮如方便法身尊像の研究』一九四〇―一九五頁、法蔵館、二〇〇三年)と具体的な疑問点を挙げている。著者が金龍説を踏襲するのであれば、これらの疑問にこそ答える必要があったのではないだろうか。

以上、筆者の読解力・表現力不足から十分に本書の魅力を伝えきれない部分もあると思うが、どうかご容赦をいただきたい。著者のさらなるご活躍を期待するとともに、稚拙な紹介を終えることとしたい。

(おいずみ・りょう 大谷大学大学院博士後期課程)

(A5判、上・四六三頁、下・五四五頁、上・一一〇〇〇円、下・一三〇〇〇円、法蔵館、上・二〇一六年、下・二〇一八年)